

源氏物語抄

大藪虎亮編



大藪虎亮編

源氏物語抄

白帝社

昭和四十年三月二十五日 発行

定価 一八〇円

編者 大藪 虎 亮

東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地

発行所 奥村 銀 松

東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地

印刷者 白帝社印刷部

東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地

発行所

白帝社

電話二六一局四三五六番

例言

一 本書は、大学教養程度の教本として、源氏物語中の適當な處を鈔したものである。

一 省略した箇所は其の都度其の梗概を挟み、卷全部省略した物は同じく其の大略を記し、以て源氏全體の大觀を掴む便宜を計つた。梗概の記述には教本として特に注意を拂つた。

一 詞の説明に多くの時間を費さぬやう適宜頭註を掲げた。

一 終りに參考として作者の事など、又舊註の主なる物を載せた。

一條兼良

我が國の至寶は源氏の物語に過ぎたるはなかるべし
——花鳥餘情——

本居宣長

此物語は殊にすぐれてめでたき物にして大かた前にも後にも類なし
——玉の小櫛——

源氏物語鈔 目次

桐	壺	一
帝	木	一八
空	蟬	四四
夕	顔	四四
若	紫	六二
末摘花	(梗概)	七九
紅葉賀	(梗概)	七九
花宴	(梗概)	八〇
葵	(梗概)	八〇
賢木	(梗概)	八〇
花散里	(梗概)	八一
須磨		八一

明

石

九八

澤

標 (梗概)

一一〇

蓬

生 (梗概)

一一〇

關

屋 (梗概)

一一〇

繪

合 (梗概)

一一〇

松

風 (梗概)

一一一

薄

雲 (梗概)

一一一

朝

顔 (梗概)

一一一

少

女 (梗概)

一一一

玉

鬘

(樺市の條)

一一二

初

音 (梗概)

一一〇

胡

蝶 (梗概)

一一〇

螢

(梗概)

一一一

常

夏 (梗概)

一一一

簪

火 (梗概)

一一一

野

分 (梗概)

一一一

行	幸	(梗概)		一一一
藤	袴	(梗概)		一一二
眞	木柱	(梗概)		一一二
梅	枝	(梗概)		一一二
藤	裏葉	(梗概)		一一二
若	菜上	(梗概)		一一三
若	菜下	(梗概)		一一三
柏	木	(梗概)		一一三
檳	笛	(梗概)		一一三
鈴	蟲	(梗概)		一一三
夕	霧	(梗概)		一一四
御	法	(梗概)		一一四
幻		(梗概)		一一四
雲	隱	(梗概)		一一四
勾	宮	(梗概)		一一四
紅	梅	(梗概)		一一五
竹	河	(梗概)		一一五

目次

四

橋	姫	梗概	一二五
椎	本	梗概	一二五
總	角	梗概	一二六
早	藏	梗概	一二六
宿	木	梗概	一二六
東	屋	梗概	一二六
浮	舟	梗概	一二七
蜻	蛉	梗概	一二七
手	習	(浮舟蘇生の條)	一二七
夢	浮橋	(小君小野に姉を訪ふ條)	一三七

附錄

源氏物語參考

桐 壺

○桐壺 第一卷。
源氏一歳―十二歳
○女御 皇后に次
ぐ御妃。にようご
ぐ更衣 女御に次
ぐ御妃。
○御方々 女御た
ち。
○安からず 心平
かならず。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いと
やんごとなききにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。
初めより、われはと思ひあがり給へる御方々、めざましきものにお
としめそねみ給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安
からず。朝夕の宮仕につけても人の心を動かし恨みを負ふつも
りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなる
を、いよく飽かずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ
憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達
部上人なども、あいなく目をそばめつと、いと目眩き人の御おぼえ
なり。唐土にもかゝる事の起りにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、

○楊貴妃 唐の玄宗の寵姫、楊は氏、貴妃は官名

按察大納言 桐壺帝
北 方 桐壺更衣

右大臣 弘徽殿女御
○大方のやんごとなき並々の深さの普通

やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど忝き御心ばへのたぐひなきを頼みにて交らひ給ふ。父の大納言はなくなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、とり立て、はかしくしき御後見しなければ、事とある時は、なほよりどころなく心細げなり。

前の世にも御契や深かりけむ、世になくきよらなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御かたちなり。一のみこは、右大臣の女御の御腹にて、よせ重く、疑なきまうけの君と世にもてかしづき聞ゆれど、この御にほひには、並び給ふべくもあらざりければ、大方のやんごとなき御思ひにて、此の君をば私物に思ほしかし

○桐壺 淑景舎の一名。清凉殿の東北に當る。梨壺（昭陽舎）、雷鳴舎（霞芳舎）、梅壺（凝花舎）、藤壺（飛香舎）を併せて禁中五舎といふ。

○前わたり 人の前を通過すること

○打橋 廊と廊との間にうちかけてつなぐ橋。取外すを得。

○渡殿 殿と殿をつなぐ廊。疊を敷き室ともなる。

○馬道 殿の中央を切通したる廊めだう。

○後凉殿 清凉殿の西にある殿。

○上局 清凉殿内にある上局と同じ局として賜ふ。

づき給ふ事限りなし。

みかどは弘徽殿女御の怨言を煩はしく思ひ給ふ。

御局は桐壺なり。數多の御かたを過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前わたりに、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。參う上り給ふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿、此處彼處の道にあやしきわざをしつゝ、御送迎の人の衣の裾堪へがたう、まさなき事どもあり。また或時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、此方彼方心をあはせて、はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとあはれと御覽じて、後凉殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣の曹司を、外に移させ給ひて上局に賜はず。その恨みましてやらむ方なし。

此の御子三歳の時、御符著の事あり。その華美一の宮の時に劣らずせさせ給ふ。

○はかなき たよ
りなき。

○限りあれば引
留むるにも限度あ
れば。

その年の夏、御息所はかなき心地に煩ひて、まかでなむとし給ふを、暇更に許させ給はず。年頃、常のあつしさになり給へれば、御目馴れて、なほしばし試みよとのみ宜はするに、日々にあもり給ひて、たゞ五六日の程にいと弱うなれば、母君泣くく奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとどめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限りあればさのみもえとどめさせ給はず、御覽じだに送らぬおぼつかなさはいふ方なく思さる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたうおも瘦せて、いとあはれと物を思ひしみながら、言に出でも聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝものし給ふを御覽するに、さし方ゆく末思しめされず、よろづの事を泣くく契り宣はすれど、御いらへもえ聞え給はず。まみなどもいとためげにて、いととなよくと、我かの氣色にて臥したれば、いかさまにかと思召し惑はる。輦車

○輦車 てぐるま。

手にて引く奥。宣旨に依りて之に乗るを得。
○宣旨 勅命。内侍之を承る。

○いとかく給へしかば、聞ゆべき事も多く侍りしものを。
○祈 更衣の里にて、病氣平癒の祈るべき人々、祈禱すべき僧ども
○聞え急がせば里(自邸)にまかり給ふべきを。

の宣旨など宣はせても、また入らせ給ひては、更にえ許させ給はず。「限りあらむ道にも、後れ先立たじと契らせ給ひけるを、さりともしち捨てては、え行きやらじ」と宣はするを女もいといみじと見奉りて、

「かぎりとして別るゝ道のかなしきにかまほしきは命なりけり」とかく思ふ給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思召すに、今日始むべき祈ども、さるべき人々うけたまはれる、「今宵より」と聞え急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせ給ひつ。御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御使の行きかふ程もなきに、なほいふせさを限りなく宣はせつるを、「夜中うち過ぐる程になむ、絶えはて給ひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて歸り参りぬ。

○かゝる程喪中。

○よろしき事 普通の事。

○かゝる別れ 親子などの生別。

○まして 之は死別なれば。

○限りあれば 御死骸を長く引留め得ざれば。

○愛宕をたぎ。 京の東北郊外なる今の修學院村。

聞し召す御心まどひ、何事も思召しわかれず、籠りおはします。御子はかくてもいと御覽ぜまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば、まかで給ひなむとす。何事かあらむとも思ほしたらず、侍ふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見奉り給へり。よろしき事にだに、かゝる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれにいふかひなし。

限りあれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、「同じけぶりにものぼりなむ」と泣きこがれ給ひて、御送の女房の車にしたひ乗り給ひて、愛宕といふ所に、いとかめしうその作法したるに、おはしつきたるこゝち、いかばかりかはありけむ。^母「むなしき御からを見るく、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今はなき人とひたぶるに思ひなりなむ」とさかしう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、「さは思ひつかし」と、

○なくぞ作者
 不明。奥入、ある
 時はありのすき
 に憎かりなく
 ぞ人の戀しかり
 前。ある時は、生
 前は。ある時は、
 氣のすゝむまゝに

人々もてわづらひ聞ゆ。うちより御使あり。三位の位贈り給ふよし、勅使來てその宣命讀むなむ、悲しき事なりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかすくち惜しうおぼさるれば、今一さぎみの位をだにと、贈らせ給ふなりけり。これにつけても、憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給ふは、さまかたちなどのめでたかりし事、心ばせのなだらかにめやすく、憎み難かりし事など、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみ給ひしか、人がらのあはれに、なさけありし御心を、うへの女房なども戀ひしのびあへり。なくてぞとは、かゝる折にやと見えたり。はかなく日頃過ぎて、後のわざなどにもこまかに訪らはせ給ふ。程經るまゝに、せん方なう悲しう思さるゝに、御方々の御とのゐなども絶えてし給はず、たゞ涙にひちて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「なき跡まで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえか

